

鹿児島県国語教育史 (V)

上原覺市・上原森芳・西村義雄の話し
ことば教育を中心にして――

はじめに

「鹿児島県国語教育史 (IV)」では昭和二十・三十年代の共通語教育の考察を試みた。その中で、終戦後しばらくの間の「共通語」指導の状況・上原森芳の「標準語」指導の変遷・川尻部落総蹶起話しことば改善運動・「ことばのほん」の成立過程・共通語指導促進要因を取り上げた。

本論考では、「鹿児島県国語教育史 (IV)」で、残された課題としてあげた、上原覺市の昭和初年代における「共通語」指導の実態・上原森芳の「標準語」指導展開過程・西村義雄の話しことば指導観とその実践過程を明らかにし、それぞれのつながりについて論述したい。また同じく課題としてあげた、「川尻部落総蹶起ことば改善運動」の実態とその評価・「はなしことばの本」(昭和三十二年八幡小学校編)の作成過程の実証的研究は、ひとつの論として記すだけの資料・証言を得られなかった。これまでの作業から考えて、今後新たな資料・証言が出てくる可能性はほとんどない。しかしながら若干の資料は得られたので末尾に(資料I)として記したい。

なお「標準語指導」・「共通語指導」・「話しことば指導」の語は、引用文献からのものは「」つきで、それ以外では、順に概念の広がりのある

新名主：鹿児島県国語教育史 (V)

るゆるやかなものとして使用したい。具体的には「標準語指導」はアクセント・イントネーション矯正に主眼がおかれ、「共通語指導」は全国共通語・地域共通語の使い分け・語いの変換・「話しことば指導」は以上のものを含みながら文末表現、場面による使い分け指導等であるが、指導の内容と形態に柔軟性があるものとして考えている。

さて、上原覺市(明治二十九年―昭和九年・三十七歳^{注2})は川尻尋常高等小首席訓導(昭和四年―昭和九年)として郷土教育に全力を尽くし、後年、地区民の回想の中に「秋霜烈日の気風があり、学校・地域の教育に心血をそそぎ、常に陣頭に立って指導した^{注3}」とある。没後五〇年を経た昭和五十九年、その功績により川尻漁港の入口に「上原覺市先生の碑」(写真)が建立され、その碑文の中に「共通語の普及^{注4}」という業績があげてある。

上原森芳(明治三十三年―昭和五十四年・七十八歳)は上原覺市の弟で鹿児島県の「話しことば指導の父」とも称されている。その指導の特色はアクセント重視の徹底したものだ。松原尋常小訓導の時、小原国芳の講演を聞き、発奮、上京し成城学園小学部の訓導となる。この時秋田の近藤国一氏が同僚としていた。その近藤氏によって、今回、上原森芳の当時の指導の方法が明らかになった。彼は昭和九年帰郷し東京時代にも増して「標準語」指導にうちこむことになる。

新名主 健 一

(一九八八年十月十五日 受理)

西村義雄(大正七年)は昭和十六年、昭和十七年の間川尻尋常高等小・昭和二十一年、昭和二十二年の間徳光小で上原森芳の片腕として「標準語」教育に打ちこんだ。西村義雄(以下西村と略す)は川尻の生まれで上原森芳の、おいにあたる。十七歳まで神戸で暮らし、その発音が「共通語」的であったために指導にあたらされたという。教職にある間一貫して話しことは指導に打ちこまれた方である。

本論考では次の三点と、それぞれのつながりと特色を明らかにしたい。

① 上原覺市の昭和初年代における「共通語」指導の実態・② 上原森芳の「標準語」指導の展開過程・③ 西村義雄の話しことば指導の展開過程と特色



上原覺市先生の碑(開聞町川尻)

「上原覺市先生の碑」の碑文の中に「共通語の普及」とあるが、上原覺市の教育観・教育実践の中でどのような位置づけができるであろうか。上原森芳(当時成城学園小學部訓導)は「郷土經營即學校經營」(「勞作教育研究」45「四三P 玉川學園 昭和八年四月」という論文の中で、兄・覺市の學校經營の目的・方法について、次のように記している。「比の郷土經營に當つての第一義は、先づ教育者自身が舊來の先生タイプの着物を脱いで純情を以て郷土の民情の中に跳び込み浸ることであると思ふ。彼等と

朝夕生活を共にし、同化して、互いに喜憂を分かちながら郷土生活の歴史・地理・文化の程度・經濟・長所・短所等あらゆる事情を調査し、理解し、將來を計畫する所がなければならぬ。一郷土人として、その生活の向上發展に對しては、村の有志以上の着眼と熱誠とを持ち無我的努力を惜しまぬ慨ある時、着々其の効を奏して、やがて郷土の經營の主權を一手に握るに至るのである。ここに郷土總動員の大經營が一大家族の如く運營される。其の中に生活する兒童は寧ろ教室より以上の教育を無意的有意的に受ける切れば血の進る少年青年が育つ。各科の研究は郷土を中心として擴く深く選擇され、兒童に勞作される。又老も若きも、男も女も各人残らず郷土意識を以て全生活が統制され、郷土生活に於ける協同、相互依存の實を見ることが出来る。」とし、「十年計畫が兄の考えであり、前五十年間に郷土の文化の統整、後五年に於いて學校教科の改造へと進み、郷土教育に凡ての教育問題を包攝して一丸となし、經濟問題、思想問題、宗教教育、政治のあらゆる問題の統整された理想的郷土民を造る事が眞の國民教育であり、社會的人格の養生ともなるとしてゐたやうである。吾が小原國芳先生も參觀して下さつて激勵のお言葉を頂戴し兄の教育が部落總動員の大勞作に依る教育である點に共鳴され……(略、引用者)」(同書四九P)つまり、學校の教育は郷土(地域)の教育に包含されるとして、その郷土の教育の内容、方法について記しているのである。また同書(五十二P)において「川尻健兒團訓練細目」が掲げてあり、その中に次のような記載がある。

言語
奥さん {と云ふ言葉の勵行(現男女青年以下は皆止しくお父さんお母さん
はつきりした力のある發音要求
本年は比の言葉を……班クラブ會をとほして……と云ふ
ワイがという言葉の抑制

教師でありながら、港の構築・登山道の整備・風俗の改善等の郷土教育の一環としての郷土の開発にも力を注ぎ、まさに一大スケールの発想の実現に力を尽くしている。聞き取り調査の中で、川尻方言である「てじよ」を「おとうさん」に、「ねによ」を「おかあさん」に、「わいが」を「君」に変えさせたことも明らかにした。また、文末表現を「共通語」でしめくり、特に動詞に着目した指導や、方言語いを「共通語」に変えさせたり、「普通語デー」が設置されたりしていたという。これまでの記述からわかるように上原覺市の、「共通語の普及」（傍点・引用者）は民俗、文化の改善の一方策としての話しことば指導であり、郷土教育の一環としてのものであることがその特色としてあげられよう。

二

「鹿児島県国語教育史（Ⅳ）」で上原森芳の「標準語」指導の実践過程の大半については記した。ここではそれ以降明らかになった史実をもとに補遺的に論述していく。

上原森芳を「標準語」指導に駆り立てていった情熱の背景として、兄、覺市の教育者としての思想・人格に対する心酔・傾倒が指摘できる。上原森芳は「新年を迎えて」（『教育問題研究・全人』八十九P所収、昭和六年一月五十五号）の中に「東京遊學に對する父の熱心、あの峻しい山坂を六十の老體を忘れて走り上った其の姿、二人の兄の眞の犠牲的友情!!」と記している。上京する際に二人の兄（伊之助・覺市）に何らかの負担をかけ、それが兄達の友情の精神から出ているとされているのである。また、同誌（十四P）の「現代生活と教育」という論文の中で「自覺者は明日とか、此の次とか、又、とか言へない。時間に於いても一瞬が生命のきざみなのである。私の兄の三年前の一句を思ひ出した。『此の一會』（誠意を

持つて人に接する。）『此の一事神宿せ。』平生の一句々々が之辭世。」と兄の生き方に対する共感を記し、教育者の望ましい姿、教育のあり方について論じている。同論文（十五P―十六P）の中で「太愛に立ち上る時、衆人の馬鹿々々しいと蹴散らした後をほほ笑みながら敬虔な態度でそれを行る。嘲笑冷評の中に、こつこつと涙と汗とほほ笑みとを以て肅々と精進する。凡人の意表外に出る。太愛は實に大愚である。小惻口さんから見たら馬鹿らしい損な事を何等の執着なく、平然として、而も命がけでやる。正に狂人の如く。無我大欲の太愛の肉彈は眞一文字に突進する。其の姿は、始め嘲罵に値するに似たれども、やがて、彼等をして壯嚴敬虔信愛の純情を喚起せずにはおかぬ。ここに教育の根本がある。」と記しているのは、おそらく兄・覺市の郷土教育の実践を念頭においているものと思われる。その兄・覺市は訓導でありながら郷土教育の一環として、港を築き、登山道を整備するなど、村の生活の「向上發展」に尽くしてきた。しかしながら、「十年計畫」の五年を過ぎた時点で、志半ばに病に倒れることになった。^{註11}前五年が郷土の文化の統制・後五年が学校教科の改造がその計画であったが、後五年の学校教科の改造の中身は今のところ不明である。兄・覺市が川尻尋常高等小の訓導として郷土のために活躍しはじめた昭和四年―昭和五年にかけて上原森芳は鹿児島市の松原尋常小の訓導であった。後年（昭和二十九年）「川尻部落総蹶起話」ことは改善運動^{註12}のピラの中で、川尻のことを「女や子供が人間的なことはあつかいを受けているでしょう。かくに親が子供に對することはづかいは全く聞くに耐えない戦国時代やそれ以前のことが今日民主国日本、平和日本の川尻に平然として使われております。」（『共通語指導の実際』川尻小・昭和三十二年・十六P）としているぐらい荒いものとしている。昭和四年―昭和九年の覺市の話しことは改善の実践より二十年経ても、かなり荒いことは駆逐されてはいなかったのである。逆に言うところ昭和四、五年当時の川尻のことは

荒さは想像を絶するものであったに違いないことをうかがわせられる。当時、上原森芳は「修身」の先生として松原尋常小にあった。その「修身」とことばの関係をうかがわせるものとして、「鹿児島県では封建的階級別のことばづかいが多く、殊に川尻には殺人的語法が多い。この方言丸出しの生活によっては人を敬愛する民主的社會人は育成されようがない。人を傷つけるような、殺すようなことばづかいを使うと、同時に手足が機敏に動いて直ちにけんかとなり、軽犯罪となる。道徳教育は正にまず『ことば』からである。」（上原森芳の指導体験録・「言語指導」二五六P所収、上甲幹一 昭和三十二年）というのがある。つまり上原森芳の「標準語」指導は、郷土化・生活化を図るための、兄・覺市の遺志を引きつぐ形のものであったことと、「修身」の目ざす人間育成のための情操陶冶であったと推定されるのである。

さて、上原森芳は松原尋常小を辞し昭和五年三月から成城学園小学部に勤務している。上原は「標準語」教育にとりかかった動機と時期について、和光学園でのアクセント事件、帰鹿してから始めた旨を記している。（「日本の方言」百三十P 柴田武 一九五八）しかしながら成城および和光学園で上原の同僚であった近藤国一によると、「上原先生が私の感化を受けたというのは全くのデマで、私が上原先生に鍛えられた。授業が終わると教員室で上原先生が発音指導をしてくれました。指を口の中に入れて上歯と下歯の関係や口形を教えてくれました。秋田の大先輩遠藤熊吉と同じやり方でした。和光の校長は秋田県人でしたが、発音はよかったが、アクセントは時々違いました。すると、上原先生が注意するのです。上原先生は和光では教師や子供の発音指導について、格別発言はしませんでした。何しろ学校騒動がようやくおさまったところでしたから。」（昭和六十三年五月十三日 筆者宛書簡^{注14}）とあるように、上原森芳は和光学園時代から発音・アクセントについて一家言を持っていたと推察される。兄・覺市の「共

通語の普及」の実践を念頭におき、上京以来意図的な努力をもって標準語の発音とアクセントの習得を心がけていたのである。昭和九年五月、兄・覺市が死去した後、同年六月には和光学園を辞し、七月には鹿児島県別府尋常高等小学校に勤務している。上原森芳には、もう一人兄がいた（伊之助・当時揖宿郡喜入高等公民学校助教諭）ので父母孝養のための帰郷の可能性は薄い。学校騒動により必ずしも東京が理想の地でないことの念が強くなっていたと考えられるので、おそらく心機一転、兄・覺市の遺業の継承を目ざしてのものであろう。しかしながら、東京での四年間に身につけた「標準語」は、帰鹿してからの上原森芳の教育実践の最も大きな柱になるのである。

これまで論述してきたことからわかるように上原伊之助（明治二十年生まれ）・上原覺市（明治三十年生まれ）・上原森芳（明治三十三年生まれ）の三兄弟は激しい気性を持ち強力なリーダーシップを発揮した教育者であったと言えよう。

三

西村義雄（以下、西村と略す）（大正七年―一九八九年）^{一〇六} 揖宿郡開聞町川尻五八五〇）は上原森芳のおい（上原森芳は西村の実母、白沢イセの弟）にあたる。その履歴は次の通りである。昭和十二年鹿児島師範二部卒・川尻小訓導（昭和十二年―昭和二十一年）・徳光小教諭（以下、略）（昭和二十一年―昭和二十二年）山川中（昭和二十二年）・徳光中（昭和二十三年―昭和二十四年）・利永中（昭和二十四年―昭和二十八年）・徳光中（昭和二十八年―昭和三十二年）・東郷小（昭和三十二年―昭和三十四年）・上甕中教頭（以下、略）（昭和三十四年―昭和三十七年）・山崎中

(昭和三十七年～昭和四十一年)・田代小、中校長(以下、略)(昭和四十一年～昭和四十五年)・別府小(昭和四十五年～昭和四十九年)・万世中(昭和四十九年～昭和五十三年)

この間、上原森芳と同一校に勤務したのは、昭和十六年～昭和十七年(川尻校)・昭和二十一年～昭和二十二年(徳光小)の二年間である。西村の記録・保存している資料は次の通りである。

1 「ことばのほん」(B5 騰写版刷り) 内容は自作テキストである。

2 「はなしことば特設指導計画」(昭和二十九年十月十二日 山川町徳光小学校) 二年 福島節 誰が早いでしょう 四年 山元一志 お話ししましょう 五年 山崎啓 私の話しぐせ 書きこまれたメモより西村が指導者として招かれた時の資料と考える

3 「ことば指導」(徳光中 昭和二十九年～昭和三十三年) 学習用語の練習・敬語の練習・ことばの正しかった者・日常会話練習・言葉練習・対話練習・言葉練習プリント・電話のかけ方・言葉じりをはっきりといましよう・大ぜいの前で話をしよう・方言問答・可能か不可能かを話す・二十の扉・単元の計画・月別留意点・ソフトボール・学習用語の練習のプリント(B4 騰写版刷り)が綴じてある。

4 「話し言葉」(昭和二十九年 徳光中) 日常会話練習・学習用語・「白鳥」「謙三の先生」・遊び用語の練習一、二・敬語の練習・学習用語の練習その一・敬語の練習(二九・四・五)・「腕じまんのお医者たち」・「学校でお菓子を食べる女の子」・「たけくらべの記」・「グッドバイ」・「ラクラクはゆれる」・「父と娘」・「一本の木」・「祭囃子」等、劇の脚本(B4 騰写版刷り)が多く綴じてある。

5 「昭和三十二年度 ことば関係資料」(東郷小) 方言と共通語・正しいことばになおしましょう

6 「ことば 昭和四十一年」ことば練習No1・動詞のアクセントNo3

7 「ことば 昭和三十四年一月以降(上甕中)」ことば練習No1・No2 標準語・方言

8 「話しことばテキスト 一九五九」 NHK中島アナウンサー指導 甕島地区広報協議会

9 「川尻中のことば研究会を見学しての感想文」 徳光中生徒(十七名 分)の感想文

前述1～9までの資料について、筆者が手紙でいろいろお尋ねした(昭和六十三年六月)ことに對し、A4ザラ紙に六十八枚(生徒の感想を入れると八十五枚)にわたる回答を得た。以下この資料を「話しことば実践史 覚え書」(西村義雄)とする。またこの外に西村は折々のことを書きとめた記録・日記(師範時代からのもの)を所持しており、膨大な量に達するという。筆者からのたび重なる問い合わせに對する回答は、それらの記録・日記からのものである。

西村の話しことば指導の展開過程とその特色は以上の資料と証言を中心材料として記すことになる。

(一) 標準語指導のスタート——上原森芳との出会い(川尻尋常高等小・昭和十六年～昭和十七年)

師範を卒業し川尻校に赴任した西村は、昭和十六年上原森芳が同校に教頭として赴任し学校経営方針の最先端に「話しことば指導」が掲げられるようになって以来、その話し方が「共通語^{注15}」的であったがために指導の前面に立たれることになったという。西村にとって神戸育ちで方言が苦手な、アクセントを含む「共通語^{注15}」指導は「あまり苦痛を感じないばかりか、水を得た魚のようであった」そうである。その頃の上原森芳は「教育熱心であり気性の激しい人であった。信念を持って行動する人であり、教育方法についても極めて高い識見を持って推進された。特に言葉指導に

は、これを完徹しなければ止まずの気迫に満ち、職員児童にも全員一丸となつて当るよう指導し、それにさからう者は、あくまでも説得し、自説を聞き入れるまでは説得し続ける。あの気迫には何人も従わざるを得なかった。^{注16}「あの気迫と実践力と理路整然たる論理の前には、誰も立ちはだかる事はできなかった。」^{注16}という。当時上原森芳は四十一、二歳である。「教育的信念といおうか、全身全霊をぶつけた教育がなされた。校風は一変して行つたのは事実である。」^{注16}というほどの実践力の持主の上原森芳には西村ならずとも感化されたに違いない。しかし後年同校職員の間から話しことば指導に邁進した者は西村一人だったことから考えて、西村を話しことば指導にむかわせたもう一つの大きな要因——川尻方言を身につけていなかったこと、話し方が「共通語」的であったこと——の大きさが指摘できる。

わずか一年にして上原森芳は穎娃村立青年学校助教諭として転出する。わずか一年でも西村に与えた影響は、時代背景もあつて大きく、昭和十七年八月に著した論文「大東亜戦下に於ける教育者としての実践的在り方」の中で、「言葉は言霊と言われ、わが国は言霊の幸あう国と云われ、現在、神勅のまにまに八紘一字の大理想が実現されようとしている。言葉は不思議な力がある。心の底より、身体をゆすぶって出て来る言葉は必ずその通りになる。われわれは、一言一句をゆるがせにしてはならない。正しいアクセントによる標準語を絶対に使用させなければならぬ。」と記し、上原森芳同様アクセント重視の立場を表明している。また同年十一月八日の日記には次のように記されている。「無軌道会^{注17}の諸兄、五年振りで、本誌を通してお話ができる。全く愉快な事だと思う。小生相変わらず川尻校、もう古株です。初四男(五十七名)の担任、よくあばれるがとても可愛いです。ご承知かとも思いますが、標準語指導に一生懸命です。これについて一席弁じてみたいのですが、残念ながら深い研究をしていないので、又の機会にゆずりたいと思います。諸兄の中には標準語不要論・

薩摩伝統精神を破壊するものである^{注18}との論を持たれる方もあろうかと思ひますので、一口だけ述べますならば、我々は今や大東亜の指導者の立場にあり、大東亜共栄圏の確立には是非とも日本語を通さねばならぬという事である。(国語四『大連から』又修身二『ことばづかい』の所にもある。)次に薩摩精神は標準語の中に於て立派に成長して行く事を確信する。我々が劇を見、映画を見た時に悲憤慷慨、拳を握り、又は腹を抱えて笑い、時には涙を拭うは、日本語の中に霊が躍動し、吾人の霊を震動しせめるからである。時に各地の方言による映画を見ることがあるがピンと来ない。それは言葉から受け取る意志疎通が、^{注19}そごするからである。同様に薩摩方言の映画を見た時、観客はそれを見、聞いて笑ってしまった事がある。それは薩摩方言の真精神を生かし得なかったからである。真底から薩摩語が語られていないからである。逆説的に、われわれが標準語を使用する時、ピンとしないものがありはしないか。勿論あり得る。これはアクセント・イントネーションの欠除によるものに外ならない。(以下余白)

標準語指導の根拠を当時の政策(大東亜共栄圏の確立と同時に日本語を公用語として制定しよう)に求め、アクセント・イントネーション重視の理由を説いている。また、「川尻小百周年記念誌」(三九P―四一P・昭和五十二年)に西村は昭和十六年の標準語指導のことについて詳しく記している。「(1) 本はすべて共通語^{注19}で書かれているのに、なぜ子どもに定着しないのであろうか。地域社会が方言であり、その中で生れ育ち、生活している。地域ぐるみの取り組みが必要である。しかし、手はじめとしては子ども達に徹底することからはじめねばならない。(2) 問題点は何か。共通語^{注19}を話しても、川尻調子の共通語である。川尻語は川尻調子で話してはじめて情感が通ずる。とするならば共通語^{注19}には共通語^{注19}の調子がある。ここに目をつけてアクセント指導がはじめられた。(3) アクセントについて。英語のアクセントは強弱で日本語は高低アクセントで音楽的である。アク

セント辞典を買って国語の本にアクセント記号をつけアクセント通りに読むことから始まった。アクセントにも法則があつて、辞典どおりつけただけでは駄目であつた。例 タツ↓タチマス点々ではなくタチマスとなる・ウゴク↑ウゴキタイ・ではなくウゴキタイ・アカイ↓アカイデス・ではなくアカイデスのようになる。法則研究が必要になる。(4) 朗読指導について。アクセントをつけたものの方言で育った教師自身アクセント通りに読むことは極めて困難であつた。現在のようにテープレコーダーがあるわけはなかつたから練習以外に方法はない。例 イマハ サクラヤ ナタネノ ハナザカリデス イマハ サクラヤ ナタネノ ハナザカリデス のように読まねばならない。(5) 教室内での会話指導。朗読指導でアクセントを音感的に覚え、これが日常会話の中に共通語^{注19}アクセントによる共通語^{注19}が生かされるための練習ということになる。例 ぼくは、花子さんの言つたことに賛成です。それは ですから。わたくしは だとおもいます。(6) 劇ことば指導 対話の部分が多くなり、感情を表現させる。即ちイントネーション(強弱・感情)の指導が加わってくる。(7) 遊びの中の会話指導 遊びの中で共通語^{注19}が自由に使えれば、一応完成です。例 タロウサン アソバナイグナニシテアソボウカジントリシヨウノ 以上のようなことを全体で、学年で、学級で、グループで指導して、個人の自由な発言へと成長して行つた。(8) 共通語^{注19}を使わせる為の工夫 奨励法、お互いに注意しあう方法、罰則適用と実になまざまな方法を用いて徹底させることに勤めた。先生方や大変だつたが子ども達は更に大変だつたと思う。(9) 県下はもちろん、全国的に共通語指導^{注19}といえ、川尻小学校とはねかえってくるまでになり、連日参観者が絶えなかつたように記憶している。参観者の中には『東京の学校にいるようだ。』と、お世辞かもしれないが、話して下さる方もいらつしやつた。(以下略……引用者) 当時の標準語指導の内容と方法について記された唯一の資料である。

さて、昭和十七年、十八年と鹿児島県は東京語アクセント習得のために現場教師を東京へ派遣^{注20}した。しかし西村は派遣されていない。このことについて西村は次のように記している。「上原覺市先生は国語教育界における鹿児島県でのことば指導の草分けであつた。私は、その実践者として上原森芳先生の意を体し猪突猛進した。県内から数多くの先生方が視察に來られ、ことば指導の必要性が県内外に伝播されて行つた。県内の各学校で『ことば指導』がはじめられ、ことば指導者の東京派遣がはじまつたのもこの頃であつた。私は派遣されなかつた。残念だと思つた事など思ひ出される。派遣された人達は、その後、ことば指導界をリードする人達となつた。」^{注20}

(二) 標準語指導開拓期(徳光小 昭和二十一年～昭和二十二年)

昭和十六年に一年間川尻校で一緒だつた上原森芳と西村は徳光小で昭和二十一年～昭和二十二年の一年間また一緒に標準語指導をしている。上原森芳は西村より一年早く赴任していた。したがってすでに上原森芳によって指導はおこなわれていたわけで、西村は「先生方の協力が得られるよう今まで指導して來られた先生方を先頭にたてるようにつとめる」^{注22}配慮をしている。強力な指導者というより啓発的で職場の雰囲気大切にされた姿が読み取れる。西村は川尻校に、この徳光の地から九年間通勤(昭和二十一年～昭和二十一年)して、全くの徳光人間で、父兄からは親しみを持って迎えられたという。当時の上原の指導内容はデスマスことばをダことばに切りかえることと男女別の言葉指導である。^{注23}この性別終助詞は昭和十六、七八年の県視学のわろ口と同様、^{注24}後援会長のきらう所になり上原森芳は頼娃村宮脇小に転任することになる。^{注25}

昭和二十一年当時、県内にあつて徳光小と岩北小の二校が標準語指導にあたっていた。岩北小の指導者は川畑長生である。両校の標準語指導の目

的・内容・方法等について比較対照してみよう。(一)内は岩北小

○目的 上原森芳は昭和九年帰鹿し別府校に赴任し「鹿児島県の言葉が如何に不自由であり不通であるかを痛感し^{注26}」と記しているが、徳光小での目的はその延長上にあると考えられる^{注27}。西村によると「都会へ就職する子どもが多い」「本はすべて共通語で書かれているのに、なぜ子どもに定着しないのであろうか^{注28}」という記述のみがその目的をうかがわせるものであるが、大枠としては上原森芳の片腕的存在であったことから、ほぼ同様のものと考えられる。(戦後の新教育の理想の実現に燃えていた私は児童中心の学級を作ろうと考えて、先ず第一に共通語をとりあげた。それは封建的な意識のつきまとう方言では、民主的な自由なのびのびした学級の雰囲気は作れないと思つたからであり、一方新しい学習形態としてとり入れた分団学習や討議学習を効果的におし進めていくためには、共通語が自由に使えるようになることが先決問題だ。(注・文中の私とは川畑長生である)^{注29}(民主主義は言論の自由からということでは討論学習が盛んにとり入れられた^{注30}《略・引用者》討論を活発にするためには標準語の教育を復活する必要がある)

徳光小は戦前からの延長と見なすことができるのに対し、岩北小は戦後の新教育の学習形態・内容・方法(討論・分団学習・討議学習)に伴つてのものにとらえられる。

○児童への指導法 昭和二十一年四月十五日(月)より朝のことば指導をはじめ。水曜日には学年別に指導する。朗読指導(アクセントを重点にして)・自由学習時のことば指導・共同学習時のことば指導・学年部別《低・中・高》指導・学級での指導・教師対児童・児童代表対児童・児童相互間で・女兒は男子ことばで言われても女兒ことばになおして話す^{注31}。(それから六カ年、私は岩北小の共通語をほんものにするために同僚とがんばった。月水金の週三回、全校児童を低中高の三部に分けて、十五分間

の部別指導・各学級での毎朝の学習用語指導^{注32})(全校朝会時に学習用語や生活用語の全体指導や学年指導を行い、学級代表による読本の朗読や簡単な会話劇などとり入れて学校全体の雰囲気づくりに努めた)^{注33}

○教師の研修 昭和二十一年五月三日(金)に「ことば指導指針」「朗読教材」をプリントし、先生方の研修をする。範読・追読方法から記号を見て発音する^{注34}。(毎朝の職員朝会時に五分間を特設してその週の指導教材である学習用語と生活用語のプリントの練習を実施した)^{注35}(毎日の昼食後の職員のアクセント練習^{注36})

徳光小、岩北小とも、目的とするところにやや違いはあるが、戦後の混乱期に標準語指導に打ちこんでいたことがわかる。

西村によると、徳光小での実践は今から四〇年も前のことで、当時の子ども達は現在五十歳であり、それらの教え子たちから「共通語を教えてもらってよかった」との声を時々聞くそうである。(昭和六十三年八月五日談)

(二) 標準語指導深化期(徳光中 昭和二十八年～昭和三十一年)

この間の資料は前記したように「ことば指導」と「話し言葉」というプリント綴りである。内容についても記した通りである。この期間における実践で特徴的なことは、川尻中学に徳光中の生徒が参観に行き、感想文を書いていること、劇を話しことば指導の中心にすえていること、録音による劇をはじめて行ったことなどである。

さて隣の川尻中学には上原森芳が講師(昭和二十五年～昭和三十一年)として勤務し、昭和二十九年十一月には「標準語指導と新教育」と題した研究冊子を発行し研究公開をしている。この研究会を川尻中から十四名の放送部員が参観に行つて感想文を書いている^{注37}。(三年二組 浜田和孝 年組不明 野元洋子 一年一組 宮田潤子 木下富士子 年組不明 たがはや子 三年二組 野元洋子 二年一組 中村恭子 三年一組 山村迪子

村口一三 三年二組 西本美代子 二年一組 西村峰 二年二組 菱田辰子 中村信子 年組氏名不明一 生徒の感想文から当日の日程は、①朝礼(校長が二年生と三年生の日誌―家庭でのご使用の実態を記したものを読む)②行進して教室へ ③研究授業(分団学習・協同学習)各教科 ④劇の順のように把握される。その感想文にあげられた事項は大きく次の五つに分けられる。①言葉の練習は大きな声ではつきり、一生懸命やっている。②言語部が各家庭の標準語使用の実態について調査して発表している。③授業はグループ学習・協同学習を中心とし、先生は答の説明のまごつき等をなおしてくれるだけ。④男子ことばと女子ことばを区別して使っている。⑤劇の時あまりにすばらしくてあつけにとられてしまった。

徳光中のことをふり返り次のように記している。○きびきびして徳光中とくらべるとまるで小学生と中学生ぐらいの差があるように思えた。○徳光のように男女の間を一メートルもあけておくなんてなかった。○はずかしがる人はいなかった。○徳光も練習をかさねていけば川尻中よりいっそううりっぱな学校になる。○徳光もこれまでいなくても、これに相当する努力が必要であろう。○私達の学校では言葉の練習といって集まった所で思いきって練習しないため、水のあわとなつていふんじゃないかと思ひます。○あんなになつたらどんなにいい学校になるだろうか。○ぼくたちの学校も、早く、ほうげんをなおして、いい言葉を使うようになったら、もっともつとよい学校になると思ひます。

十四名の生徒達は川尻中の標準語使用の実態をつぶさに見て深い感銘を受けている。徳光中に帰り標準語使用のリーダーとして活躍したであろうことは想像に難くない。

当時の川尻中での上原森芳の指導について西村は次のように記している。「上原森芳先生の指導であるので、私が川尻小・徳光小で指導を受けていた当時の方法に更に深みが加わっている。話しことば指導一筋に生き

続けている先生だと痛感する。信念に燃え、全勢力を注ぎ込んで、火の玉となつてゐる姿がそこにある。」³⁸

さて、この徳光中での西村の「ことば」指導の内容は「ことば練習用のプリント」で知ることができる。そのプリントの内容は、学習用語・敬語・日常会話・対話練習・先生との対話・電話のかけ方(市内・市外)・言葉じりをはつきり言おう・皆の前で話そう・アクセントの変化(教師用)・方言問答を標準語になおして話す・発問に対する答の種々の変化を修得せしめると同時に、おもしろいやすい語法に注意する・二十の扉・遊び用語・発音練習・正しい敬語・あいづちのうちかた・口の体操、である。

その指導の方法は次の通りである。①全校朝会で一斉に ②朝のホームで各学級別指導 ③言語部員が放送を通じて指導 ④朗読放送 ⑤放送劇 ⑥終りのホームで反省 ⑦学習時間で(グループ学習・協同学習・休み時間(放送部・先生方・生徒に交つて遊ぶ))

この期における「ことば指導」の特色は劇を取り入れたことであろう。その目的を西村は次のように記している。「①劇のことばは、日常会話用語が多く含まれている。②ラジオ放送などで馴染が深い。③アクセント・イントネーションが正しい。特にイントネーションが強調されるので感情の表現がよく出る。④劇の練習によつて国語・社会その他の読み方に心情を表現しようとする努力がなされる。」³⁹「私は話しことば指導の一環として劇を取り入れることにより、心が、感情が豊かになり、その表現方法は共通語である。とすればそれに伴う発音は、正しいアクセント・イントネーションによらなければ、感情の疎通はあり得ないという考え方により劇をとり入れた。」⁴⁰その練習の時間は、①言語部が放課後集まつて練習し放送する(生放送と録音放送) ②各学級に放送日を割当てる。各学級で話し合い、練習方法など決定して実施するといふもので、主として録音による放送がなされた。練習に要した時間・方法・効果については次のように記

している。「劇によって異なる。一時間から二時間位はなかったと思う。劇の録音作成は次の順序で行う。下読みをする・アクセント、イントネーションに気をつけながら読む・録音する・録音を聞き反省点を話し合う」^{注41}「昼食時間等に放送する・放送することによって自覚が生まれる。聞く耳が肥えてくる（あそこは、自分だったらこのように表現する。あの表現の仕方はよい……）」^{注42}そして劇に録音を取り入れたことについて「劇に録音を取り入れた事（昭和三十年）は画期的な事であったと思う。現在ではレコードによる劇が行われているが、その火つけ役をしたのは、私達であったといささか自負したい気持ちである。」^{注43}とし「山川町の学芸発表大会で、はじめての企画として録音放送による劇を披露した。県内ではじめての事ではなかったろうかと思う。マイクをつりさげたり、持ち廻したりしないでよい。しかし録音に合わせて所作をすることには相当の抵抗があり練習に時間を要した。山川町学芸発表会ではセリフがはっきり聞こえたので大好評であった事を思い出す。」^{注44}と回想している。この学芸発表会での劇（「祭囃子」）の録音（昭和三十年西村義雄先生録音・山口〈旧・中村〉恭子保存・昭和四十八年池田英俊先生再録）を聞いたが当時の徳光中の話しことば指導の到達点を象徴しているように、そのアクセント・イントネーションにはなまりはない。

さて、前述した川尻中の「標準語指導と新教育」（昭和二十九年）の研究会を初めとし、県の国語教育界も戦後の「共通語」指導の全盛期を迎えることになる。その間、県の「ことばの本」作成の前後に見られるテキスト作りの努力と、テキスト利用、あるいはそれをもとにした独自のカリキュラム作りの模索と実践の時代であったといつてよい。国語教育界の大きな流れの外で西村の実践は着々と行われていくことになる。

（四）「共通語」指導への変換期（東郷小・昭和三十二年～昭和三十三年）

昭和三十二年になり、西村は二〇年間住みなれた徳光を離れ、東郷小に赴任することになった。昭和二十六年版学習指導要領では、「方言・なまりの矯正・正しい共通語・方言はできるだけ避ける」という表現で、十二年試案より調子がやわらかくなっている。したがって流れとして厳格な意味での標準語から全国共通語としての指導に変化していつており、西村も例外ではない。記録からたどると、この東郷小のある北薩地方は県内の学校が共通語指導に取り組んだ昭和三十年代において、話しことばの研究会は開かれていない。「東郷の方言は川尻地区の荒い、強い方言にくらべ、どうしてもなおしていかなきゃならんという感じを持ってないやわらかな表現であった。」^{注45}こともあり、川尻・徳光時代ほど強い指導はなされなかったようである。当時の東郷小の実態は、「共通語の問題については、取り上げられていなかったので、方言の使用は当然の事であり、ことば指導には関心がなかった。」^{注46}というものであった。ここで西村は今村校長というすばらしい教育者に会うことになる。「私の教案・日記に、私の悩みに応え、教育のあり方など、こまごまと朱書され、常に激励して下さった。」^{注46}と回想している。その今村校長の西村に対する添削は次のようなものである。「昭和三十一年七月一日 言葉と生活の問題は痛切に感じています。共通語の問題はお説の通り五十年位かかるでしょう。言語としつけの問題、深い示唆を受けて有難い。」「昭和三十二年九月三十日 先生が子どもと共に帚を持たれる校庭の姿も、先生の教育日記も、又グループ学習も、この精神を生かしていたらいいと私は存じております。有難いことです。言葉の指導の問題は国語教育の本質にはつきり定められている。用具観と、言語を大切に美しいものにする二方面があるから言葉の純化は是非やらねばならぬことだと思えます。」「昭和三十二年十二月三日 言葉指導の効果が全校に芽生えつつあることを発見して、今朝は誠によい朝でした。」指導の方法・手順として「職員会等で先生方の意見を聞き、一応

私が音頭をとって指導する事で了解を求める。朝会時を活用して、ことば指導をする。」が「当初は、あつけにとられ、笑い声があふれる場面にも遭遇する。しかし、だんだんと子ども達の目が輝いてきた。」^{注48}「そうである。また、職員研修においては、ことば指導問題を徐々に取り上げ、教育方法の研修を柱とし、学習態型を、自由学習→グループ学習→協同学習→教師のしめくりという流れにすることを提唱している。それは「必然的にことば指導の必要性が痛感させられる。」ことをもくろんだものであろう。

(五)「ことば指導」への変換(上甕中教頭・昭和三十四年一月～昭和三十七年三月末、山崎中教頭 昭和三十七年～昭和四十五年)

この時期の西村の「ことば」指導の内容は、①週行事(月)として講堂朝会でことば指導をする。②学習部で朝よみの実施 ③放送部で「ことば練習」の放送をする。④方言を集めて標準語になおして練習する。⑤学習指導の中で標準語の使用が徹底するよう努力する等であった。^{注49}島の子供達は都会に行かなければならない運命になっていたから、その面から自覚をうながしたという。また島の子供達は割合に素直であり、標準語を使わなければならないという気持ちは多分にもっていたという。

昭和三十四年七月四日(土)の「ことば練習」は、○趣きをかえて、動作をして見せ、それをことばに表現させる ○方言と気づかないものをとるあげる(お金を捨てた↓おとした・お湯がいたい↓あつい・本をなおります↓しまう等)という内容のことを指導している。毎週月曜と土曜の朝会時に「ことば練習」がなされており、週の努力事項に「ていねいなことばを使う」とか、週番の反省に「ことばづかいを正しく」とか、「ことばづかいの研究があげられている。月・土曜のみならず、学年別ことば練習は水曜日にも行われていた記録(昭和三十四年十月二十一日、昭和三十四年十一月十八日)もある。当時は自家発電によって校内放送を行って、昭

和三十四年七月一日の記録によれば、「放送例をあげ、それをどのようにすればよいかを検討し、修正する作業をさせる。放送についてのことばの表し方について検討を加えることによって正しい表現方法を会得させる。放送を聞く立場に立って放送用語を考えさせる。」とある。「ことば指導」は順調に行ったわけではないらしく、昭和三十五年六月二十七日の記録によると「朝作業後はざわざわしていて気乗りがしない。腹がむかむかして来る。練習する生徒、殆んどない。怒りたくなる心をしずめながら放送を続ける。先生方の協力なしにはとうてい出来ないと思うが、心をなだめながら辛棒強く続けて行きたいと思う。」^{注50}とある。また当時の状況は「学習時間帯と遊びの時間は全然別個のことばの世界であった。」^{注51}とあり、休み時間は方言が使用されていたことがうかがえる。この時期には、方言と共通語の比較表を作り、次のような指導がなされている。「①子ども達から方言を取り出させ、それを共通語になおす。比較対照することによって共通語に対する認識を深める。②ことば練習の時に方言で言って共通語になおして発表する。方言→共通語への転訳がスムーズに、反射的に行われることを目標とする。」その結果「笑いながらも関心が高まって来た。」^{注52}とある。

昭和三十四年七月にはNHK中島アナウンサーが指導して話しことば講習会(甕島地区広報協議会主催)が行われている。この講習会を西村も受講している。その際の資料「話しことばテキスト」の中身は「Ⅰ 私達が使う言葉について・Ⅱ 共通語と鹿児島言葉はどんなところが違っているのでしょうか・Ⅲ 話し方で気をつけたいことはどんなことでしょうか」とあり、こまかに具体例があげてある。

※「昭和三十四年一月以降 ことば」というプリント綴りの中に標準語、方言の語いの比較の草稿があるので巻末に資料Ⅲとして記載しておく。

昭和三十七年に西村は山崎中に転勤する。記録による山崎での指導は「ことば練習 昭和三十七年五月十四日・五月二十一日、教頭会で、ことば指導」提起（昭和三十七年六月五日）・ことばづかい——先生が方言をつかわない、家庭の人がひやかさない——「六月八日」^{注53}という記述しかない。昭和三十九年になり「生徒会努力目標に、あいさつ・ことばづかいを正しく」とあり、同年十一月十一日に県教委の学校訪問があり、その席上、池田主事が「方言はわるい言葉ではない。機会に応じて共通語が使えればよい。」^{注54}という発言をしている。これは三十三年版学習指導要領の「必要な場合は共通語で話すこと」を受けたものであろう。この頃を境として県内の話しことば指導の研究会は開催されなくなっている。このことは、全国的な傾向として方言の見直しがなされ、テレビ・ラジオ番組の中で方言を中心に構成されたものが編成されるようになり、方言に対するアレルギー的拒否反応自体が一昔前のものと考えられるようになったことと無縁ではない。昭和四十年代になると「なぜ方言が——」という疑問が声高な主張となってくるのである。それと呼応するかのようには西村のことば指導の資料も昭和四十一年以降は途切れている。

昭和四十一年になり西村は田代小・中の校長として赴任している。この間の資料は「ことば 昭41」のプリント綴りしかない。その中身はことば練習でアクセントが記してあるものである。誰を対象に、どんな方法で行ったのか、効果はどうだったのかの問い合わせに対し、西村は次のように記している。「ことば指導の必要性を理解してもらい、月曜日の朝会の時に私が指導者となって『ことばのほん』を中心に指導した。校長主導体制では徹底した指導が行われない。職員の『ことば指導』に対する熱意と実践が必要である。しかしこの盛り上りをつくる事はできなかった。」^{注55}

西村はその後、別府小（昭和四十五年・昭和四十九年）・万世中（昭和四十九年・昭和五十三年）の校長を勤め退職した。この間、ことば指導に関する資料はない。前述のごとく西村は啓発型のリーダーであったことや、校長職に忙殺されたことから前面に立つての指導はなされなかったであろう。当時県行政当局と組合との対立はすさまじく、学校経営もそちらの方にエネルギーの大半が費やされたようである。その間の事情は論文「道」（昭和五十三年二月）、「浮き沈みの歩み——別府小最後の年の分会斗争に悩まされた日記録であるので敢て資料とした——」（昭和五十三年二月）に詳しい。西村の人生観・教育観がにじみ出た記録である。

これまでの論述からわかるように、西村のことば指導の実践過程の発端は、鹿児島県の「話しことば指導の父」と称される上原森芳と同一校に勤務し、ことば指導にあたるべき条件（自らのことばが「共通語」的であった）を備えていたというところにある。戦前の標準語指導から昭和三十年頃までの標準語指導は、確かに国の施策としての指導が戦前のものであり、昭和二十六年以降の共通語指導とは、ズレが認められる。そのことの原因は、いわば鹿児島県のことば指導の総本山でもあり、源流ともいえる川尻校、徳光小での上原森芳の強力な指導のしからしむるところであろう。県の国語教育界が西村と同様に国の流れよりワンテンポずれて共通語指導に打ち込んだのは、上原森芳の強烈な「標準語」指導の余韻とも考えられる。また指導せざるを得ないようなコミュニケーション上の問題も存在していた。西村が国語教育界の流れとは別に身をおき、ことば指導に打ちこんだ理由も、ひとつはことば指導のメッカともいえる川尻校・徳光小に勤務したことと、自らの体験（四歳で神戸に行き十七歳までそこで生育。したがって鹿児島方言を身につけておらず帰鹿して後コミュニケーション上の問題も抱えた）にもよるところが大きい。国語の教師でなく、理数系の教師で

ありながら打ちこんだことは、それらのことが背景にあると考えられる。その実践の特色は、自作のプリントを作成し、その地に合うようなテキスト化を図っていたことと、劇による指導にあると言つてよい。折々に綴つたという丹念な日記・記録は、いつか誰からか聞いた「偉大な教育者は自らの実践の記録を丹念に記している」のことは通り歴史的な実践展開をほぼ正確に再現し、その検討を通して西村の教育者としての資質・営為を評価できる大きな手がかりになった。

おわりに

揖宿郡開聞町・山川町は鹿児島県の「話しことば指導発祥の地」と言える。それは昭和初年代の上原覺市の活躍、上原森芳の強力な実践、西村義雄による継承の所産である。「川尻小百周年記念誌」の「卒業生の回顧」欄に、話しことば指導をあげている記事の多いことは、その実践がなみはずれてなされたことの証しといえる。何とかしなければならぬという、やむにやまれぬ気持ちから上原兄弟を駆り立てていったものであると考えられるし、西村もまたそうである。それらの実践には昭和三十年代のはなしことば研究のお題目のひとつとされた「学習効果をあげるための」という発想は見られない。あくまで地域社会に生きる一人の人間のコミュニケーション上の問題をとりはらおうとするものが主眼としてあった。(上原森芳は他に精神衛生上の問題もあげているが、それは論中に触れてある)

上原森芳はまさに波瀾万丈の人生を生きた、激しい教育者であったと推定されるのに対し、西村は戦前こそことば指導の旗振りをなしたが、戦後は啓発的なリーダーとして地道な実践を重ねてきたと言える。校長になり他の問題にエネルギーの大半をうばわれて、ことば指導に打ちこむことができなかった状況は今でもそう変わらないであろう。あれほど有能な、指

導方法を持った教師が管理職になると、だんだん実践から遠ざかざるを得ないような状況は、まことに惜しい。長年の経験を何らかの形で生かす方策を求めることが今後必要であろう。

最後になったが、この論考を執筆するにあたり資料提供・証言・便宜をはかっていただいた方のお名前を記して感謝の意を表したい。

西村義雄・近藤国一・永吉清隆・養手重則・大井秀男・成城学園教育研究所・玉川学園秘書室

注1 「川尻部落総躍起ことば改善運動」については、昭和六十三年八月に開聞町

教育委員会を通じて開聞町川尻地区の中で六〇歳以上の方がおられる世帯に、この運動について覚えておられる方がいないかどうか等についてのビラを配布した。しかし昭和六十三年九月末現在、覚えていたとの申し出はない。注2 拙稿「鹿児島県国語教育史(Ⅳ)」の三二四P十一行目で三十三歳としているがこれは三十七歳の誤りである。

注3 「むかしをひもとけば」(開聞町教育委員会 昭和六十二年)の中に「回想」として青見正人氏が記している。(同誌二六P)

注4 碑文は次の通りである。「先生は明治三十年十二月三日川尻に生まれ、大正七年鹿児島師範学校卒業勝目川尻西市来の附属小学校などの訓導を歴任され、昭和四年再び川尻小学校首席訓導として赴任された。教育者としての卓越した識見をもって郷土愛に情熱を燃し、子弟の教育と地域開発に精魂を傾けた。修養団の結成、少年消防組織、健児団、早起会、日曜学校の開設更に県下全域に名声を博した共通語の普及など、住民意識の向上による郷土づくりに資し、今日の川尻発展の基礎を築かれた。

特に川尻漁港建設には粉骨砕身され、部落総動員体制で昭和七年漁港の前身船溜り施設を構築、以後漁協の誕生、漁港規模の拡大整備が進み現在第二種漁港に昇格し、漁業発展の基礎づくりに貢献されたが、大志半ばにして昭和九年五月四日三十七歳の若さをもってこの地に燃え尽くされた。

嗚呼、ここに先生の遺業を讀み部落民挙つてこの碑を建立す」

注5 上原覺市生存時は共通語とは称さず、普通語または標準語と称していた。

共通語の名称は昭和二十六年版学習指導要領がでてから使われはじめている。

注6 玉川学園秘書室によると、小原国芳は、大正十四年、昭和三年、昭和五年、昭和七年に鹿児島を訪れている。上原森芳の上京は昭和五年であるから、小原国芳の参観は昭和七年と推定される。

注7 川尻地区の子供、青年を、幼児団、健児団（学校の児童、生徒を中心にしたもの）青年団と分けて組織化していた。（西村義雄氏談）

注8 昭和六十三年八月五日西村義雄氏談 共通語化の方策としての文末表現・動詞の指導は、時代を下ること三〇年程たった昭和三十七年に中尾温雄が「鹿児島国語教育十号」に「方言語いはほとんどが述語で、特に動詞を重点的に指導した方が効果的である。」（先生に話しかける児童のことばの実態）（同誌所収論文一七P）と記している。

注9 「標準語の使用は、学校教育上からも社会生活上からも重要な条件にもかかわらず、一般に方言が先行し、その徹底は等閑視されていた。上原先生は家庭の理解や協力を得て部落ぐるみ標準語の使用を徹底すべく、苦心惨憺せられていた隠忍努力の甲斐あり、遂にトド・ネニョ・オンジョ・ウンボ等いやな方言はいっしかなわなくなり、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん等正しく美しい標準語に変わっていった。普及にあたっては厳格そのものであった。大正十一年の或る朝の朝礼で標準語を正しく使わなかった上級生に容赦なく先生の手や足のむちが飛んでいった。又青年団の一般家庭への連絡等にも方言の使用を許さず、誰よりも強く郷土や部落民を愛されていた先覚者の先生の姿が目につかぶ」（小学校時代の想い出）仙田政吉「川尻小創立百周年記念誌」三八P所収・昭和五二年）

注10 明治二十年三月七日生まれ。明治四十四年三月鹿児島縣師範學校本科第一部卒、昭和十八年三月魚見國民學校校長退職。（魚見小に残された履歴書による）明治四十四年～大正四年の間肝属郡神山尋常高等小學校に勤め、その間磯長武雄を教える。「山茶花」（昭和十二年五月號）に「上原伊之助先生 十一首」として磯長は歌を詠んでいる。その和歌の内容から伊之助の教育者としての人物像が想像できる。

先生の家に通ひて朝學にはげみし中に養はれたる

親鸞の信者にまじし先生は朝の念佛を先づ申されき

先生より受けし薫化はいまになほわが生活の柱となりぬ

身を以て教へ給ひし先生の感化はわれの血を流れをり

端座して教へを受けし少年のわがおもかげのまぎまぎと見ゆ

平凡の生涯ながら眞實に生きたることを先生に告げむ

先生の期待に添はぬ平凡の生涯ながらおのれを恥ぢず

火のごとき言葉を吐かず先生の鞭はちりちりになりぬ幾度か

教壇に拳を握り説きましし先生は而も慍情の人なりき

教育にたづさはり来てけふ殊にかかる先生を見るべくもなし

魂の相觸れてゆく教育にひたすらなりし先生を思ふ

注11 「郷土經營即學校經營」（上原森芳「勞作教育研究45」所収 昭和八年四月）

注12 上原覺市の実践に「總動員」という語がよく使われていることから、そのイメージを踏襲したものであらう。また「標準語」についても柴田武は「強力なお題目」として、その意味での使用かと思われる。

注13 成城事件を指す。昭和八年成城学園の小原校長の学園改組と人事異動に端を発した事件で、小原派反小原派の抗争があった。昭和八年九月十四日、小原教師に免職辞令を今村理事長名で八名に送付しているが、その中に上原森芳も含まれている。その後昭和九年四月に和光学園が発足し、その教員スタッフの中に上原森芳はいっている。この事件については「教育問題研究」（第八十七號、成城学園）「成城文化史一九三六」（成城学園高等学校同窓会）「成城学園六十年」（昭和五十三年十月成城学園）「戦前の和光学園」（和光学園四十年誌）「実録はっさい先生」（昭和六十三年一月協同出版）「第一次成城事件関係年表」（一九八五・六・竹下昌之）に詳しい。

注14 近藤国一氏が上原森芳の同僚だったことを知り、同氏にいくつかの件で問い合わせをしたが、「上原森芳は近藤先生の感化を受けたと推察されますが、どうだったでしょうか。当時の上原森芳の標準語指導はどんなものであったでしょうか。」という問いに対する返信である。

注15 「話しことば実践史覚え書」六〇P、しかしながら当時は共通語なる名称は使用していなかったと思われたので再度問い合せたところ、「共通語でなく標準語と言っていました。昭和十七年の論文に標準語と書いてありました。」という回答を得た。(昭和六十三年十月五日筆者宛書簡) 論述の中には原表記のまま記すことにする。

注16 「話しことば実践史覚え書」(以下「覚え書き」と略す) 五四・五五P

注17 師範学校昭和十二年卒の同窓会の名称。

注18 「昭和十六・七八年頃だよ ですわ 思うよ 思うわと性別終助詞をつけた話言葉指導をやっていたら、ある県視学はあんなあまったるいことばをわがサツマ武士の国に使わせると土風がすたれ日本は戦争にまけてしまうところ口をいったそうである。」(「言語指導」二五六P 上甲幹一昭和三十一年)と上原森芳も記している。なお「鹿児島県国語研究史(Ⅳ)」の三二〇P上段後ろから二行目、(前出「日本の方言」)は「言語指導」の誤りである。

注19 注15と同じ。

注20 「鹿児島県国語教育の歩み」吉嶺勉(「吉嶺勉先生遺稿集」所収)に詳しい。

注21 「覚え書き」八五P

注22 「覚え書き」四P

注23 拙稿「鹿児島県国語教育史(Ⅳ)」(鹿児島大学教育学部研究紀要「昭和六十二年三二〇P-三二一P所収」)

注24 注18参照

注25 注18の「言語指導」二五六P

注26 注23の三二〇P

注27 「日本の方言」(柴田武)によると「『なるほど、ねらいは精神衛生にあるのですね。』『いいことを教わりました。わたしの標準語教育をこたま教育』といつてひやかす人がいるんですが、あなたのように『精神衛生のことは教育』といわれればビッターします。」と上原森芳は述べている。(同書一二二P) (昭和二十九年時)と若干ニュアンスが違っている。

注28 「覚え書き」八〇P

注29 注23の文献三二一P なお文中の共通語は標準語の誤りであろう。

注30 拙稿「鹿児島県話しことば教育史資料および文献解題」(「教育学部研究紀要第三十九巻」三五四P)

注31 「覚え書き」一P

注32 注23の文献三二一P

注33 注29の文献三五五P

注34 注31の文献二P

注35 注29文献三五五P

注36 注23の文献三二一P

注37 「覚え書き」一二P-三〇P

注38 「覚え書き」三一P

注39 「覚え書き」三八P

注40 「覚え書き」三七P

注41 「覚え書き」三五P

注42 「覚え書き」三二P

注43 「覚え書き」三五P

注44 「覚え書き」三七P

注45 昭和六十三年八月五日西村談

注46 「覚え書き」四〇P

注47 「覚え書き」三六P

注48 「覚え書き」四〇P

注49 「覚え書き」四三P

注50 「覚え書き」四六P

注51 「覚え書き」四四P

注52 「覚え書き」四五P

注53 「覚え書き」四九P

注54 「覚え書き」五〇P

注55 「覚え書き」四二P

〈資料〉

I

「川尻部落総蹶起話しことば改善運動」について

昭和六十三年八月に開聞町教育委員会に依頼し、川尻地区の六十歳以上の人がある世帯に前記運動について覚えておられる方、資料をお持ちの方によりかかるビラを配布した。昭和六十三年九月末現在何んら反応はない。

「はなしことばの本」(昭和三十二年八幡小学校編)の作成過程

「鹿児島県国語教育史(Ⅳ)」を読まれた養手重則氏から次のような便りをいただいた。この件についてはこれ以上明らかにすることはないと思われる。

「三二〇ページ下段(注、前記拙稿)の疑義について当時の八幡小国語主任であった吉村次雄君から状況をきいてあなたに答えようと思つて、お礼がおそくなりました。吉村君からは同封のような返事が参りました。(注後記)、この返書を正しく踏まえながら、私の考えをこれから述べることにします。その前に話しことば指導に関する鹿国研の事業と八幡小の事業とを上下対照、表にします。

〈鹿国研〉

S 31・3 ことばのほん(低学年・

高学年用出版)

S 31・5 NHKから「ことばのお

ねえさん」(低学年)「こ

とばのほん」(高学年用)

〈八幡小〉

毎週一回放送開始

S 31・6 第一回鹿児島県話し言葉

指導研究大会開催(於八

幡小 村山校長、吉村国

語主任)午後の全体協議

会で「ことばのほん」低

高用一本化が要望され、

私が要望の実現を約束

S 32年以降 定期的に県内各地を廻

って大会を開催↓S 39

S 33 ことばのほん改定版(一

本化)出版

S 33・9 ことばのほん指導書出版

S 32・4 吉村君奄美小へ転勤

S 32・10 八幡小版はなしことばの

本作成

S 33・6 第七回八幡小主催 話し

ことば指導公開研究会

S 34・4 吉村君山下小へ転勤・村

山正熊校長退職

戦後の鹿児島の話し言葉指導は民主主義教育の立場から単元学習における話し合い学習の重視ということで、その価値が見直されて、昭和二十年代後半から三十年代前半はその頂点に達した。私自身も話し言葉指導の重要性を正しく認識していたので、「ことばのほん」の作成を肝要として、秋田の近藤国一氏から秋田のことばのほんを送ってもらい、それにもとづいて鹿児島版の「ことばのほん」(低学年用・高学年用)を作成し、NHK鹿児島放送局の仲田アナウンサーと提携して、それぞれ毎週一回十分間ずつ単元別に放送してもらうことにした。そして昭和三十一年六月末鹿児島市で話し言葉指導を強力に推進していた八幡小学校長村山正熊氏、国語主任吉村次雄氏にお願いして、県版ことばのほんを使用して第一回鹿児島県

話し言葉指導研究大会を八幡小を会場として開催し、爾後昭和三十九年まで定期的に年一回県内各地の話し言葉を熱心に推進している小学校を会場として研究会を実施していった。

村山校長は昭和十七年の第一回鹿児島県共通語（注、標準語）研修派遣教員の一人で、戦後八幡小校長として話し言葉指導の企画推進指導の先頭に立ち、同校の話し言葉指導の基礎と方向とを確立した偉大な校長で、私とは肝胆相照らす仲であった。同校では早くから職員手製の話し言葉指導のテキストを作って使っていたが、県版のことばのほんほど完全なものではなかった。そこで鹿国研主催の第一回の鹿児島県話しことば指導研究会を実施していただくことで全校の教師児童に「ことばのほん」を全員に無償で提供したと思う。八幡小はそれまで毎年、自家製のことばのほんをテキストとして、毎年一回公開研究会を定期的に開いてきたのであって昭和三十三年六月二十七日の第七回話しことば指導研究会は鹿国研主催ではなく同校主催のものであろう。少なくとも昭和三十三年の鹿国研主催の鹿児島県話し言葉指導研究会は県内の別の小学校で開催されている。（略、引用者）当事者として中心的存在であった吉村君の返書によっても、昭和三十一年六月には県版ことばのほんを使用し公開しながら昭和三十二年十月には八幡小版「はなしことばの本」を作製したのか、という矛盾は明確には解明されないようですね。私自身もこの矛盾は記憶に残っていません。（以下略—引用者—）

〈昭和六十三年五月十四日付け筆者あて書簡〉

養手氏の問い合わせに対する吉村次雄氏の返書 「さて、おはがきを拝見いたしました、私の記憶の中に全然浮かんできません。そこで、年代を考えてみましたところ、私は昭和32年4月奄美小に転勤になり、そして二年して昭和34年4月から山下小に勤務しております。

新名主：鹿児島県話しことば教育史資料

今静かに記憶の糸をたどっていきますと、村山校長から自校の「ことばの本」を作ったというのを聞かされました。それは、あくまでも標準アクセントを習得する目的のものであったようです。これは昭和十七年、共通語（筆者注、標準語）習得のために東京に派遣された一人であったという自負があったからだと思います。

私が山下小に転勤になると同時に村山校長も定年退職でした。校長なくしては、この本の利用は出来なかつたらしく、私の子供も八幡小の五年生として転入したのですが、その本は利用されなかつたようです。そのようなことで私もその本にはお目にかかっていません。（略—引用者—）やはりアクセント一本では興味もないし、かえって子供の発表力を抑えることになったのではないかと思う次第です。（以下略—引用者—）

II

「昭和三十二年度 ことば関係資料」方言と共通語

ただしいことばになおしましょう。

「はんな、こい、しゅちよいや」

「うんだ、そげんだ、しゅちよつど」（「おや、したん」）

「がっこうい、いっが」

「もへ いっつけ、まだ はやからお」

「はよなかど、もう 八じ じゃらお」

「八じ十分にでて、まにあわおう」

「そうじが あいこで」

「いっと まっちよいやい いっきくつで」

（「いっこいやん、あたい、ちよっと おくるつで」）

「もう、もどいけ」

「はんと、いっしよけ、もどつが」

「もう、いっと、あそつがあ」

「なんして、あそつけ」

「おにごっこ、すうが」

「うんだ、ざっしをしろごっじゃ」

「うんだ、おにごっこをすごっじゃ」

「じゃんけんできむかい」

「うん、じゃんけんばい、あいこでほい」

「おいが、かったで、ざっしを見いが」

「うんだ、ざっしどま見ろごっなか」

「はんな、ちゃんけんでまけたらお」

「うんだ、そげんた、すかんでお、うんだ、三郎と遊ぼうと」

「はんな、きめたこつ、まもらんとや」

「はんが、ひとりで、よんで、よからお あたや、あそんでくつで、バイ
バイ」

「そげーなちゃ、あたや、本をよんでな」

（あなたはどうしますか）

「あそつけいっが、はよ、きやん あたいげえで、あそつが」

「なゆして、あそつと」

「なんがよかるかい」

「カルタをすうや」

「うん、カルタをすつが」

したん

「うんだ、そげんた しっちよつど」

「おや、したん」

「おいだ、したん」

さそい

「学校いっが」

「はんと、もどおが」

「もう、もどおが」

「かえつが」

「おにごっこ すうが」

「ざっしを見いが」

「あそつけいっが」

「あつそつがな」

「なにをしてあそつけ」

「おいが、すつで見ちよいやん」

「あたれも、かたっしやん」

「ゆっかつしやん」

「はよ、きやん」

「はよ、いきやん」

「はんな、もどいやん」

「いっこいやん」

「はんな、うつでなあ、おぼえちよつきやんお」

「もう、おしかで、あした、あすつが」

「今日はないか、あつたちゆうが」

「あした、うだげえ、あすび、きやん、ないかしてあすつが」

「日曜日な、川いたって遊び、いたって、いおをとって、あすつが」

「遊び、いけば、がいやつで、いかんが」

「あした、だすうが」

「ずがをかつが」

「そげんしてかけばいかんが」

欲求

「こんだあ、いっがなあ」

「水をもごつだあ」

「そんなちまんかみちを自動車がとおつどかいなあ」

「おや、いっごつでなあ」

「うんだどんにもゆつかつしやん」

「はよ、こんか」

ど

「はんとにや、あすばんど」

「うたつくうど」

「おいも、かつど」

「おいもかこう」

「はがいか」……（じれったい）

「なよすつと」

まだみてもらはんど

じゃつど

「しか、でけんかったじゃつど」

「しつちよつど」

「おや、見らんど」

「ずんばい、あつど」

なかあ

「うんだすごじやなかあ」

しやん

「みちでゆうて、きかつしやん」

「ざつしをみしやん」

たずねる

「おはんな、どけいとなあ」

「おはんな、ないしけいとなあ」

「あすつこつぱつかいかんげちよいな」

「こんだ、なよ、さつしやどかいな、はがいか」

うながす

「はんな、きやいお」

「……、かえらんけ」

「学校へ いっが」

「学校へいこや」

「あすび、いっがあ」

「いっごいやん」

「づがを、はよかつが」

「あす、だすつが」

「もう、かえつが」

「ははっど」

「もう、いっきはしまつが」

「いっき、きやんをなあ」

「おいも、いいが」

「もとうが」

「もどつごいやん」

せん、でけん

「はしいがでけん」

「はわつがでけん」

「うんだ、もやせんで」

やあ

「うんだどな、しがでけんでやあ」

命令

「はんな、はしってこんけ」

「……はよせんけ」

「はしらんけ」

「おはんな、いっご、いやんせ」

「はんな、きやあんお」

「ローカをはしらんじ、おらんけ」

「はんな、ハンカチをもつてこんけ、あしたから」

「はよ、こんか」

「はんな、みらんじおらんけ」

「んにゃ」

「はんとにや、あすばんど、あっちいっきやん」

「遊じよらんじ、はよせんけ」

「はや、あっちであそべ」

他へいいつける

「はんな、ゆうでなあ」

「はんな、うっで、ゆうでなあ」

「先生に、ゆうど」

「もういちど、けてけっち、いやったど」

「流行歌をうたわんじおらんけ」

疑問

「あんた、ないけ」

「まだ、ないが、あいけなあ」

「まだけー」

「もう、かっとなけ」

「はんな、かっが、ないけ」

「はんな、どけいたと」

「こんだ、ないすつと」
「こんだないけな」
「そげん、じゃあけね」
「はんと、はしいぐらこすうが、どっちが、はやかどかいなあ」
「こや、いげんすつとお」
「なんち、いやったけ」

感嘆

「はんな、よごれちよつなあ」
「はんな、はやかなあ」
「はんな、字がきれかなあ」
「わや、きれが字じゃんね」
「てそかあ」
「はがいか」……（じれつたいね）
「わいのへは、ふとかへじゃあな」
「ばかが」
「もう、どっさい、みつかったど、よかつたなあ」
「うんに、はがいか、この人は」
「したんでなあ」
「よいなこて、かつとつた」

……お

肯定

「もう、よからあお」
「そげんじゃしとなあ」
「いっき、そこんさきじゃらお」

「はんが、はよみやらんでお」
「ゆうで、かすつでおう」
「はんが、声は、ちんかで、きこえんなお」
「はんな、右ん方をとおらな、いかなお」
「はんな、ゆつかすんなち、いやったお」

有先権

「あたい、先お」

否定

「おいがノートいかつたくんな」
「人がもんの、かかいやんな」
「そえん、しやんな」
「うんだ、したん」
「おや、ないも、すごつじやなか」
「そげん、いやんな」
「はんな、すかん」

けんか

「ないよ、わいが」
「わいが、うっど」
「わや、あした、うったくつでね、おぼえちよれ」

ど

「うんだ、そげんた、しつちよらんど」
「……しつちよっど」

「こんた、はんじゃっど」

「うんだ、かせんど」

で

「いっき、いたつくつで」

たずねる

「ないがよ」

……と

「はんな、どこにき、いたちよったと」

おう

「ゆうで、おう」

「そげんせんでよからあおう」

「かんまん、なおう」

じゃらお

「わや、あえんとを、しらしゃいんじゃあ」

Ⅲ

「昭和三十四年一月以降 ことば」

標準語

方言

〔小島〕

①魚つりに行こう

①いよついかーいこーい

②遊びにいこう

③打つぞ

④くわ

⑤屋根

⑥ゆか下

⑦夏みかん

⑧かみの毛

⑨井戸

⑩僕は今十書いたよ

⑪ごめん下さい

⑫あめを売って下さい

⑬君は走るのがうまいね

⑭ありますか

⑮かまど

⑯きょうはよい天気だ

⑰かまど

⑱おつゆ

⑲君達は何をしていますか

⑳寒いですね

㉑どこに行きましたか

㉒あなたはどこからきましたか

㉓松の木にからすがとまっています

㉔もう何も知りません

㉕うるさいですからもう少し静かにして下さい

㉖とおもろこし

㉗とんび

②あすぶかーいこーい

③うたいーろー（くわすいろー）

④とんが

⑤かわや

⑥いかんた

⑦らいらい

⑧かつさげ

⑨いがわ

⑩おあーいま十かーたー

⑪ごめんないもせ

⑫あめばういやえ

⑬あつかーはしーとが早かとなー

⑭あいとか

⑮かまど

⑯きゆうなよか天気やいろー

⑰いーよ

⑱すい

⑲あぐらーなんばしよいとか

⑳ひやかとなー

㉑ろけーいたとか

㉒あつかーろつかーきたとか

㉓まつときーかやしのとまろい

㉔もーなんも知やんろー

㉕せかやつかれーもちつと静にせんか

㉖みーきーび

㉗とおび

- ②8 あすこに蜂の巣がある
- ②9 ぼくにも見せて
- ③0 かきをたべよう
- ③1 ひよどり
- ③2 わかりません
- ③3 大便
- ③4 お医者さん
- ③5 犬
- ③6 麦ごはん
- ③7 魚はうまいですね
- ③8 泳ぐ
- ③9 お母さん
- ④0 蛙
- ④1 せみ
- ④2 少し
- ④3 めじろ
- ④4 畑を耕す
- ④5 おばあさん
- ④6 おじいさん
- ④7 水
- ④8 いったでしょう
- ④9 びわ
- ⑤0 行きなさい
- ⑤1 とるな
- ⑤2 そんな物は何もないでしょう
- ⑤3 考えつかない

- ②8 あっけえー(ー)はじん巢のあい
- ②9 おえーにも見せう
- ③0 かきばかまあ
- ③1 ひよろい
- ③2 しやんろー
- ③3 くそ
- ③4 いさろん
- ③5 いん
- ③6 麦んめーし
- ③7 いやなまかとなー
- ③8
- ③9 おつかーん
- ④0 ろんくー
- ④1 せび
- ④2 ちつと
- ④3 はなしー
- ④4 畑ばうつ
- ④5 ばゝ
- ④6 じい
- ④7 みじ
- ④8 ゆたおが
- ④9 ひや
- ⑤0 行けよ(行かんか)
- ⑤1 といな
- ⑤2 そがんだもんな何もなかおが
- ⑤3 おめらさん

- ⑤4 昼めし
 - ⑤5 うどん
 - ⑤6 ざる
 - ⑤7 風呂に入りなさい
 - ⑤8 ねむい
 - ⑤9 小さい者のくせに
 - ⑥0 今お帰りですか
 - ⑥1 何故なくの
 - ⑥2 いいえ
 - ⑥3 赤ちゃんを産んだ
 - ⑥4 すてないで持っていなさい
- 〔江石〕
- ⑥5 きれいな花だねえ
 - ⑥6 むだ話をするな
 - ⑥7 馬鹿だねえ
 - ⑥8 おかしを下さい
 - ⑥9 おまえたち
 - ⑦0 字を書いたか
 - ⑦1 魚つりに行こう
 - ⑦2 何をしているか
 - ⑦3 もうすこし
 - ⑦4 なし
 - ⑦5 なんですか
 - ⑦6 ひよこが産まれた
 - ⑦7 あめを下さい
 - ⑦8 何を書こうか

- ⑤4 ひいめし
- ⑤5 うろん
- ⑤6 へーそ
- ⑤7 ふれーいやんか
- ⑤8 ねぶかー
- ⑤9 こまなかもんのくせー
- ⑥0 いまもういいいとな
- ⑥1 なっかーなくとか
- ⑥2 んーな
- ⑥3 赤ちゃんばもった
- ⑥4 しっちゃんじーもつとあんか
- ⑥5 きれえか花やなあ
- ⑥6 むだ話ばすんな
- ⑥7 馬鹿やらあ
- ⑥8 かしばくれえ
- ⑥9 あぐだあ
- ⑦0 字ばけえたとか
- ⑦1 いやつりけいこおい
- ⑦2 何ばしとつとか
- ⑦3 もうちつと
- ⑦4 なあし
- ⑦5 なんかよ
- ⑦6 ひよこのうまれたとよ
- ⑦7 あめばくれえ
- ⑦8 なんばかこうか

- | | |
|---------------|--------------|
| ⑦9 すてようか | ⑦9 ひつつうか |
| ⑧0 大きなあ | ⑧0 ふっとかもんや |
| ⑧1 こぼしてしまった | ⑧1 こぼしてしもうたが |
| ⑧2 かまわない | ⑧2 かまわない |
| ⑧3 うまい | ⑧3 んまか |
| ⑧4 けがをしている | ⑧4 けがばしとる |
| ⑧5 消ゴムをかして下さい | ⑧5 消しゴムばかせ |
| ⑧6 鏡 | ⑧6 かがあみ |
| ⑧7 米のごはん | ⑧7 はっちりこう |
| ⑧8 やね | ⑧8 やあね |
| ⑧9 旦 | ⑧9 めんとう |
| ⑨0 鳥にえさをやりなさい | ⑨0 とわりいえさばやれ |